様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１８４５６

研究課題名（和文）シーア派イスラームの聖廟・墓地の形成と発展：法理論と地理空間情報による総合的研究

研究課題名（英文）Formation and Development of Saint Shrines and Public Cemeteries in Shiite Islamic Societies

研究代表者
守川　知子（Morikawa, Tomoko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：００４３１２９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：歴史的墓地の残るイランのシーラーズ市とイスファハーン市で、墓地や聖者廟を重点的に調査するとともに、調査の過程で閲覧することのできた個人蔵の「新出」史料および市街図や歴史史料などを用いて、都市空間構造内の墓地と聖者廟について検討した。その結果、都市域の発展と、墓地および聖者廟との立地の間には密接不可分な関連があり、元来は街区や集落の“外”にあった墓地兼聖者廟が、都市化に伴い、聖者廟のみは居住地の中に残り続ける一方、附設していた一般信徒のための墓地は消失することが明らかとなった。この間の研究成果や得られた新たな知見は、6本の学術論文として発表し、2023年3月開催の国際研究集会で報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
聖者廟（シーア派の場合はイマーム聖廟）に埋葬される「移葬」という独自の“葬送儀礼”をもつシーア派の墓地や聖者廟について研究することは、国内外を問わず、これまで顧みられることがほとんどなかったきわめて斬新な研究テーマである。また、本研究は、イスラーム社会のみならず、将来的には世界中の「墓地研究（墓学）」のパイロットスタディとなることを目指している。この新たな「墓地研究」によって、人々の死生観にまで迫る分野横断型の研究が新たに誕生することから、学術的な意義はきわめて大きいといえよう。

研究成果の概要（英文）：In Shiraz and Isfahan, Iran, where relatively old historical cemeteries still remain, I focused my research on and examined cemeteries and mausoleums of saints within the urban spatial structure using "new discovered" historical documents in private collections, historical city maps and documents. As a result, it became clear that there was an inseparable relationship between the development of the urban area and the cemeteries and shrines, and that the shrines of the saints, which used to be cemeteries outside of city walls, continued to remain in the residential areas as they became urbanized, while the cemeteries attached to them for the general public disappeared. The new findings and other related results on shrines, cemeteries and also 'transport of corpses'- specific funeral tradition in Shi'ite societies - were published in the form of 6 papers and presented at international workshops in March 2023.

研究分野：西アジア史

キーワード：墓　シーア派　死生観　イスラーム　都市　聖者廟　移葬

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

イスラームでは、最後の審判や来世といった人間の「死後」の事象や、葬送儀礼や埋葬作法などについては教義上詳細に定められ理解されている一方、「死」や「墓」に関する研究はほとんど見られない。とりわけ「不浄」の場である墓については、18 世紀半ばに興ったワッハーブ派が、個人の墓を参詣することや墓を飾り建物を建てることを、「墓崇敬」や「聖者崇拝」につながる「異端行為（ビドア）」として糾弾し、徹底して禁じている。そのため、イスラーム社会の「墓」に関する研究は、国内外を問わず、概して低調といえる状況にあった。しかしながら、現実にはイスラーム社会において、「墓」のない場所は存在せず、歴史的には各地に聖人・聖者の墓廟や一般墓地が形成されてきた。特に、シーア派においては、指導者たるイマームへの思慕が「聖者崇敬」的要素を併せ持っていたことから、イマーム廟参詣・巡礼が大規模に行われている。本研究代表者の守川はこれまでこのようなシーア派社会の聖地巡礼について研究を行ってきたが、その中でも聖地巡礼は生きている者だけが行うのではない、というシーア派独自のあり方に着目した。すなわち、死者もまた、生きている者とほぼ同様の作法で「巡礼」を果たし、そして巡礼後はその聖者の墓のそばに埋葬されるのである（これを「移葬」という）。その結果、イマームの墓廟の傍らには広大な墓地の広がる空間が形成される。なかでもシーア派初代イマーム・アリーの聖廟を擁するイラクのナジャフは、聖廟の北側に隣接するワーディー・アッサラーム墓地に 500 万人を超える被葬者が眠る世界最大級の墓地となっている。

なぜこのように墓が巨大化するのか、そこにはシーア派に特有の宗教的理由および「死」に対するスンナ派とは異なる考え方や死生観があるのではなかろうか、また墓地が形成されるにあたって聖廟と墓地のどちらが先なのか、という問いが、本研究を構想するに至った背景である。

２．研究の目的

本研究は、これまで看過されてきたイスラーム社会の「墓（墓地）」を、都市の空間構造内の重要な要素とみなすことにより、核となる偉人・聖人・聖者の「聖墓・聖廟」と、その周りに一般信徒の被葬者が集まり墓地として発展・拡張していく過程や、聖廟と一般墓地との位置関係、たとえば墓地のメルクマールとなる聖廟に対して、一般墓地は東西南北(あるいはメッカの方角)のどの方向に広がるのか、都市化に際して聖廟や墓地はどうなるのか、といった点を考察する。すなわち、本研究は、シーア派社会の「墓」に関しての法解釈に基づく理論的側面と、情報処理による空間構造的生成・発展過程、および聖者廟や一般墓地の歴史的盛衰の分析・検討を通じて、墓地と都市との相関関係を捉え直し、ひいては西アジア地域社会やムスリム社会の新たな一面を提示するものである。同時に、教義教則では推し量ることの不可能な、ムスリムたちの死生観に迫ることを目的とする。

３．研究の方法

シーア派イスラーム社会におけるイマーム・聖者・聖人の墓廟（聖廟）と一般信徒の墓地の形成および発展過程を、以下の 2 つのアプローチによって明らかにする。ひとつは、シーア派法学者のアラビア語の著作や法学書に見られる理論的側面からの検討であり、もうひとつは、比較的古くからの墓地の残るイランの 3 つの都市（シーラーズ、イスファハーン、タブリーズ）を対象とした一般墓地およびその中の墓石・墓碑の実地調査と墓地に関する歴史史料分析による網羅的なデータ収集（主に被葬者の没年と墓地内での位置）と GIS（地理空間情報システム）によるデータ分析という実態面から考察する。これらを組み合わせることにより、シーア派社会の「墓」を網羅的に解明することが可能となる。

４．研究成果

5 年間にわたる研究期間において、後半の 3 年間は新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により現地調査を遂行できず、また総まとめと位置づけていた国際研究集会「Cemeteries, Mausoleum and Shrines in Islamic Societies（イスラーム社会の墓地と聖者廟)」を開催することができなかったため、個々の墓石や墓碑の実地調査や史料調査、イラン以外の他地域や他都市との比較検討を行うことがかなわなかった。それゆえ、本研究が当初の目的のすべてを達成し完結したとは言い難い。しかしながら、イランのシーラーズとイスファハーンで歴史的な公共（一般）墓地や聖者廟を重点的に調査し、この調査の過程で「新出」資料にめぐりあうことができたため、今後の研究の指標となる基礎的データや「墓地研究」の新たな方向性を見出すに至った。ここでは上記の 2 つの都市の聖者廟と墓地に関して得られた成果に絞って紹介する。「イスラーム社会の墓地研究」そのものが日本国内はもとより、国外でも新機軸となる研究分野であるために、以下の新たな知見はいずれも、国際的なインパクトはきわめて大きく、今後、国際学会（2023 年 8 月開催の ECIS10 など）や国際的な学術雑誌で発表していく予定である。

(1) シーラーズ墓地・聖者廟調査と「新出」史料

イランのファールス州の州都であるシーラーズでは、17～18 世紀にさかのぼることの可能なダール・アッサラーム墓地、20 世紀初頭に造成されたダール・ラフマ墓地などの公共墓地のほ

か、シャー・チェラーグ廟（被葬者はシーア派第 8 代イマーム・レザーの兄弟アフマドで、9 世紀初頭にこの地で殉教）、ハーフェズ廟（イランを代表する 14 世紀の詩人）、サアディー廟（13 世紀のイランの著名な詩人）、イブラーヒーム廟、ビービー・ドホタラーン（娘さんたち）廟（13～14 世紀のイル・ハン朝期に建造）、スィーブーエ廟（8 世紀の学者）、シャイフ・ルーズベハーン・バクリー廟（1209 年没のスーフィー聖者）などの“聖者廟”を重点的に調査した。また、シーラーズでは、調査の過程で、個人蔵の未公刊資料 *Daftar-i Raport-i Ghassal-khana-yi Shiraz*（シーラーズ死亡埋葬台帳）を閲覧する機会を得、同台帳に記載される 1920 年代の 1 年間の約 1000 名の死亡者の名前・年齢・性別・居住街区・墓地（埋葬地）・死亡診断医・葬儀場所等について、データベース化と数量分析を行った（図 1 参照：同図はシーラーズの公共墓地ごとの被葬者の割合を示したものである。当該年に死去したシーラーズ住民のうち半数はダール・アッサラーム墓地に埋葬されている）。上述のシーラーズ市内の聖者廟は、古いものほど聖者廟と街区の名称とが一致しており、おおむね街区ごとに聖者廟を擁している。歴史的にイスラーム社会では、聖者廟が一般墓地の機能も果たしていることから、個々の聖者廟および墓地と、街区の出身者の割合を算出したところ、約半数の住民はシーラーズの当時の都市域外（市壁外）のダール・アッサラーム墓地に埋葬されているが、一方で街区内にある著名な聖者廟に埋葬されるケースが多くみられるなど、街区と聖者廟と墓地の相関関係が明らかとなるきわめて興味深いデータを得ることができた。この「新出」史料とその考察結果については、今後、さらに検討を進めていく予定である。

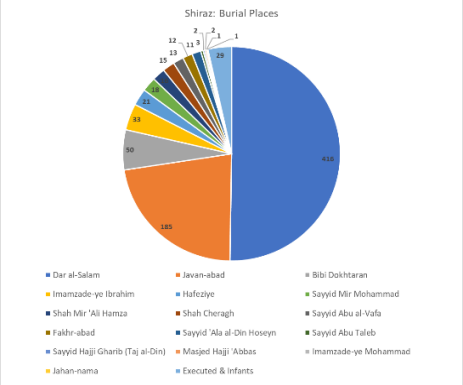

図 1 1925 年のシーラーズの死亡者埋葬地

（2）イスファハーンの都市空間と墓地と聖者廟

17 世紀にサファヴィー朝の首都となったイスファハーンは、古都であるがゆえに文献史料も多く残されている。イスファハーンでは、タフテ・フーラード墓地や、ザーヤンデルード川の南岸にあるアルメニア人墓地を集中的に調査した。また、1924 年に作成されたイスファハーン市街図や、1890 年に収税吏のミールザー・フサイン・ハーンによって著されたペルシア語の『イスファハーン地誌』を主要史料として、それらの史資料に見える墓地や聖者廟について掘り下げて検討した。まず、『イスファハーン地誌』にて言及のある 23 の墓地の説明を訳出し、その分析結果とあわせて、拙稿「イスファハーンの歴史的墓地にみる都市と墓地の空間構造」新学術領域研究『都市文明の本質―古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究４』2022 年、205-216 頁）にまとめた。ここで明らかになったことは、墓地の立地においては、市壁や市門の中か外のどちらにあるかが重視される点である。いみじくもフランス人旅行者のシャルダンは、17 世紀中葉のイスファハーンについて、市壁内の墓地は 12 であるが、「ペルシアでは、墓地はほとんど町の外にあるということに注目しなければならない」と述べているのと同様である。

このイスファハーンの 19 世紀の墓地の情報をもとに、墓地と聖者廟との位置関係を問い直すべく、1924 年のイスファハーン市街図を詳細に分析した。その過程で、同市街図をマッピングし、凡例に基づいて色分けしたところ（図２参照）、イスファハーンの市街地構造が可視化され、墓地は町の東・北・西側にあり、川に近い南側にはないこと、および比較的広大な墓地は市街地の端（市門のそば）に位置していることが明らかとなった（なお、この市街図にみえる墓地はいずれも、20 世紀後半の都市化・宅地化の過程で消失した）。次に、聖者廟の立地を同市街図で確認すると、“由緒ある”聖者廟ほど市街地の中に墓地を有していることや、聖者廟がイスファハーンの金曜モスクからほぼ同心円状の距離に位置していることが明らかとなった。これらの検討結果については、拙稿「イスファハーンの聖者廟―1924 年市街図の「イマームザーデ」の分析を中心に」（新学術領域研究『都市文明の本質―古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究５』、2023 年、201-222 頁）に結実させることができた。

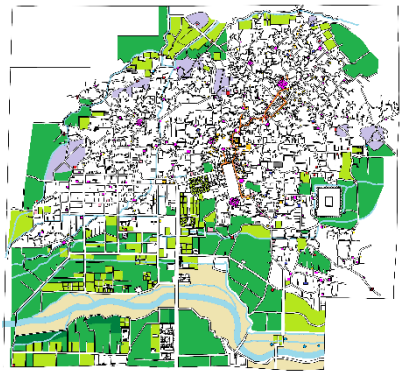
図 2 1924 年イスファハーン市街図
＊墓地は薄紫色

これらの実地調査と歴史史料との照合の結果、都市域の発展と墓地および聖者廟との間には密接不可分な関連があることが確認され、都市空間構造上、1）一般墓地は都市の市壁の外側に造成される、2）住民は街区内、もしくは街区に近い方角の市壁の外に位置する墓地に埋葬される、3）聖者廟はかつての墓地の跡地を示し、ひいては市壁の位置を示す、4）聖者廟は街区の墓地として機能し、また移葬の際の遺体の仮置きの場ともなる、5）都市の拡大や発展とともに聖者廟が都市の中に取り込まれると、附設の墓地は消失するも聖者廟は残りつづける、といった点が明らかとなった。

以上のような研究成果を踏まえ、今後は、他都市やシーア派以外の他地域との比較検討を行い、イスラーム社会における「墓地研究（墓学）」の確立を目指していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 守川 知子、モリカワ トモコ、MORIKAWA Tomoko	４．巻 5
２．論文標題 イスファハーンの聖者廟―1924 年市街図の「イマームザーデ」の分析を中心に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 新学術領域研究『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究５』研究成果報告 2022年度	６．最初と最後の頁 201-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 守川 知子、モリカワ トモコ、MORIKAWA Tomoko	４．巻 1
２．論文標題 聖都アルダビールとサファヴィー朝下のサフィー廟	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究 別冊（Journal of Asian and African Studies, Supplement）	６．最初と最後の頁 213～230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117350	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 守川 知子、モリカワ トモコ、MORIKAWA Tomoko	４．巻 4
２．論文標題 イスファハーンの歴史的墓地にみる都市と墓地の空間構造	５．発行年 2022年
３．雑誌名 新学術領域研究『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究４』研究成果報告 2021年度	６．最初と最後の頁 205-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 守川知子	４．巻 1011
２．論文標題 隔離される巡礼者たち――シーア派聖地巡礼と検疫制度の近代	５．発行年 2021年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 26-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomoko Moriakwa	4．巻 117
2．論文標題 The Study of West Asian History in Japan: A Historical Review and Recent Developments	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Acta Asiatica (Bulletin of the Institute of Eastern Culture)	6．最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 守川知子	4．巻 34
2．論文標題 移葬の心性史―シーア派イスラーム社会における死者の聖地巡礼	5．発行年 2018年
3．雑誌名 比較文明	6．最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Tomoko Morikawa
2．発表標題 Mapping Medieval Isfahan: Urban areas, minarets and cemeteries
3．学会等名 International Workshop: Echoes from the Medieval West Asian Cities（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Tomoko Morikawa
2．発表標題 Baghdad as a Center of Shi ’ i Pilgrims in the Nineteenth Century
3．学会等名 International Workshop: BAGHDAD 756-2023（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 守川知子
２．発表標題 聖都アルダビールとサファヴィー朝――サフィー廟を中心に
３．学会等名 2019年度公開研究会「アルダビール再考：前近代イランにおけるタリーカ・聖者廟・都市」
４．発表年 2020年

１．発表者名 Tomoko Morikawa
２．発表標題 Non-Muslim Minorities and a Shi’ite Empire: Armenians and Jews in Safavid Persia
３．学会等名 Sixth European Congress on World and Global History: Minorities, Cultures of Integration, and Patterns of Exclusion（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 守川知子
２．発表標題 シーア派イスラーム社会のイマーム崇敬と聖廟巡礼
３．学会等名 スペイン史学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 守川知子
２．発表標題 シーア派ムスリムのみた17世紀の仏教世界――サファヴィー朝使節団とシャム
３．学会等名 第43回龍谷大学東洋史学研究会研究大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomoko Morikawa
２．発表標題 Muhammad Rabi‘ b. Muhammad Ibrahim: A Muslim Traveller to the Theravada Buddhist Society
３．学会等名 International Workshop on “Trades, Migration, Belief: Crossing Early Modern Asia, 16th-18th Centuries”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 八木　久美子、イスラーム文化事典 編集委員会、守川知子（分担執筆：「巡礼・参詣（イラン）」「異教徒との関係（イラン）」）	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 748
３．書名 イスラーム文化事典	

１．著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、冨谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎、守川知子（分担執筆：宗派化する世界――宗教・国家・民衆）	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 304
３．書名 構造化される世界 14～19世紀	

１．著者名 社会経済史学会、馬場　哲、守川知子（分担執筆：巡礼と門前町）	４．発行年 2021年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 746
３．書名 社会経済史学事典	

１．著者名 上島　享、吉田　一彦、守川知子（分担執筆：イスラーム教の聖地巡礼とその多層性――日本の巡礼との比較研究に向けて）	４．発行年 2021年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 358
３．書名 世界のなかの日本宗教	

１．著者名 弘末雅士、守川知子（分担執筆：西アジアのキャラバン・ルートと巡礼者）	４．発行年 2018年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 350
３．書名 海と陸の織りなす世界史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 International Workshop: Echoes from the Medieval West Asian Cities	開催年 2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
イラン	イスファハーン大学	イラン考古学研究所		